

## シンポジウム “付加テクトニクス”

構造地質研究会「夏の例会」において、“付加テクトニクス”をテーマとするシンポジウムと巡検を2回にわたって行なった。第1回目は1987年8月4日－6日に、九州大学の坂井卓氏・西琢郎氏が世話人となり、大分県津久見市徳浦にある戸高厚生会館を会場とし、秩父累帯南帯と四万十帯を巡検した。第2回目は1988年8月12日－14日に、大阪市大の大塚勉氏、地調の脇田浩二氏と筆者が世話人となって、愛知県瀬戸市の愛知県立労働者研修センターを借りて、美濃帯の巡検を行なった。

日本列島の基盤を構成する中・古生層の多くは、過去のプレート収束域で形成された付加コンプレックスからなる。コンプレックスの形成機構についてはメランジュの成因を始めとして未解決の構造地質学的諸課題が多数あり、それらの究明が待たれている。過去の付加コンプレックスの研究では、日本の中・古生界コンプレックスについての微化石生層序学を用いた研究の進展がめざましく、コンプレックスを構成する堆積岩の地質時代、詳細な地質図、そしてこれらに基づいた地体構造区分などは世界屈指の精度で解明されてきている。これらは付加コンプレックスの構造解析に欠かせない基礎的資料となっている。一方、DSDP、ODPを中心とする現世付加体に関する研究は、付加体の地質構造、付加の機構、付加される堆積物の物性やそれに累進的に発達する変形構造等を解明し、過去の付加コンプレックスの研究に重要な手がかりを与えている。中でも前弧域に広範囲に分布することが明らかにされた泥ダイアピル及び泥火山は、メランジュの成因として脚光を浴びつつある。

以上のような付加コンプレックスをめぐる状況を考慮して、世話人は、今回のシンポジウムを各地域の付加コンプレックスの研究の到達点を紹介し、付加の過程で形成されたとみなされるメランジュ、覆瓦構造、未固結堆積物の構造変形等の諸現象の特徴をとらえ、付加に伴う地質構造・変形構造は何か、その形成機構や付加体形成時の造構環境はどういうものか、そして今後の構造地質学的諸課題が浮彫りにできるものになりたいと企画した。シンポジウムでは、秩父帯、四万十帯、美濃一丹波帯の堆積岩コンプレックスに関する問題だけでなく、現世付加体の研究成果、メランジュ研究のレビュー及び用語の整理等も含めて検討した。シンポジウムでの研究発表は22講演行われ、会内外の約40－50人が集まり活発な討論が行われた。その内、シンポジウムで発表されなかった1論文も含め、投稿された16編の論文を本研究誌におさめた。

今回のシンポジウムを通して、メランジュに関する用語の共通理解、各地体を通じたメランジュの産出形態の共通性や相違点がとらえられたと思う。付加コンプレックスの造構モデルを確立する上で、すべての構造的諸課題が検討されたわけではないが、これを機会に、今後付加コンプレックスに関する研究が活発になれば今回のシンポジウムは成功と言えよう。なお、今回は前弧域における堆積作用については討論されなかったが、付加テクトニクスを考える上で欠くことのできない事柄であり、近い内に変形作用と合わせて議論する機会がもたれれば幸いである。

シンポジウムの会場を借りるにあたっては、戸高鉱業所(株)の方々と、元地質調査所名古屋出張所の下坂瑠子氏には大変便宜をはかっていただいた。ここに記して感謝申し上げる。

（木村克己 記）